



Title	戦国竹書の用字・書法と書写者 : 清華簡『邦家之政』を中心として
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2021, 67, p. 18-27
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/83252">https://doi.org/10.18910/83252</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 戦国竹書の用字・書法と書写者

―清華簡『邦家之政』を中心として―

福田 哲之

## 序言

筆者は先に同筆・同冊と見なされる清華簡『良臣』・『祝辞』の字迹について分析を加え、両篇には顕著な晋系の特徴が認められることを明らかにし、書写者は晋系の書記習慣をもつ非楚人であった可能性を指摘した（注1）。楚地出土の戦国竹書の文字に認められる非楚系要素の混淆については、これまで書写者を楚人と見る立場から、専ら楚地に伝播した他系文字によるテキスト（底本）からの影響という側面が注目されてきた。しかし、前稿の検討結果を踏まえれば、テキストの伝播のみならず非楚人の移入も含めた複雑な要因が想定されよう。

本稿ではこのような意図にもとづき『清華大学蔵戦国竹簡（捌）』所収の『邦家之政』を取り上げ、用字・書法の両面から楚系および晋系文字との比較を試み、書写者の問題について考察を加えてみたい（注2）。なお、本稿における「用字」の語は文字の用い方、「書法」の語は点画の構造や形体（曲直・長短・離合など）にかかわる文字の書き方を指して用いる。また以下の

分析および図版に用いた資料については、末尾の「参考文献」に掲げた。

## 一 『邦家之政』の用字

『邦家之政』は、国家の政治理念に関する某公と孔子との問答からなり、現在までに公表された清華簡の中では孔子が登場する唯一の文献である。文字の検討に入る前に『清華大学蔵戦国竹簡（捌）』の「説明」にもとづき、書誌の概要を記しておく（注3）。

本篇はもと十三枚の竹簡によって編成されていたが、現状は第一・二簡を缺失し、残存するのは十一枚である。そのうち第三簡の上部・下部、および第五・二三簡の上部に残欠がある。完簡の長さは約四十五センチ、幅は約〇・六センチ、三道の編繩をもつ。一簡中の書写字数は二十八から三十四字までと一定しておらず、文字は比較的明瞭である。簡背には「三」から「十三」までの番号が書かれており、「一」・「二」を缺く。簡背には劃痕があるが、原冊は劃痕どおりの編聯にはなつて

おらず、簡背の数字にしたがって復原したところ、内容がスムーズにつながった。原冊には篇題は見えず、篇名は内容および簡文に見える「邦家之政」により擬定した。

それでは、まず用字から見ていこう。結論を先に述べれば、『邦家之政』の用字は概ね楚系と合致し、晋系の影響と見なし得る例は認められないようである。以下、用例を挙げて分析を加える（通し番号の下は竹簡編号、「」は『邦家之政』の用例、（ ）は現行の文字を示す）。

- 1 簡7「冢」(家) 楚系と合致—晋系は「冢」に作る
- 2 簡7「聖」(聽) 楚系と合致—晋系は「聖」・「聵」に作る
- 3 簡9「女」(焉) 楚系と合致—晋系は「焉」に作る
- 4 簡11「虐」(乎) 楚系と合致—晋系は「虐」に作る
- 5 簡12「司」(始) 楚系と合致—晋系は「司」に作る
- 6 簡13「當」(當) 楚系と合致—晋系は「尚」に作る

1～6は、楚系と晋系との用字に差異が認められる文字であり、『邦家之政』はいずれも楚系と合致する(注4)。

- 7 簡5・7「曼」(文)
- 8 簡10「駐」(窺)
- 9 簡11「類」(類)

7～9は、晋系との差異を明らかにし得ないが、楚系と見なされる他の戦国竹書に同じ用例が見え、楚系の用字と見なされる(注5)。

『邦家之政』の用字が楚系に属することは、さらに「見」からも裏付けられる。裘錫圭氏によって明らかにされたように、楚系では「見」・「視」を表す文字に、以下のごとき対応関係が認められる。

見 || 見 (見)  
見 || 見 (視)

この使い分けは殷代の甲骨文に遡るが、春秋末から戦国期にかけて混同が生じ、最終的に楚以外の諸国では、本来「視」を表していた「見」が「見」の専用字となり、それにかわって形声字の「眡」や「眡」が用いられた(注6)。『邦家之政』には「見」は見えないが、「見」は簡6と簡10に各一例認められる。以下に示すように、本文相互の対応関係および類似の表現をもつ伝世文献との比較から、これらの「見」はいずれも「視」と釈読され、楚系の用字と合致することが知られる(注7)。

- ・女(如)是、則見(視)元(其)民必女(如)腸(傷)矣、下贍(瞻)元(其)上女(如)父母。【簡6】
- 『春秋左氏伝』哀公元年「臣聞國之興也、視(見)民如傷、是其福也。」
- ・女(如)是、則見(視)元(其)民女(如)齒(草)蓍(芥)矣、下贍(瞻)元(其)上女(如)寇(寇)馘(讎)矣。【簡10～11】
- 『孟子』離婁下「君之視(見)臣如土芥、則臣視(見)君如寇讎。」























これまで具体的な用例を通して見たように、『邦家之政』の用字は概ね楚系と合致し、清華簡の他のいくつかの諸篇に指摘されているような晋系の特徴を示す例は見いだされないようである(注8)。したがって、用字面に注目

すれば『邦家之政』は比較的純度の高い楚系テキストと見なされる。

## 二 『邦家之政』の書法

次に書法に移ろう。結論を先に述べれば、『邦家之政』の書法には、用字とは対照的に晋系との緊密な共通性が認められる。以下、書法の特徴を①～④に整理し、各用例を表にまとめて分析を加える。表中の算用数字は各資料の番号を示し、資料名称は便宜的に簡称に従う場合がある。


### ①点画の構造

楚系	晋系	良臣・祝辞	邦政
 金滕 03	 侯馬 156:1 「之」	 良臣 03	 06 「上」
 邦道 07	 新出 温県 WT1 K14:572 「圭」	 祝辞 01	 06 「上」
 郭店 老乙 11	 中山王墓 墨書玉器 「玉」	 良臣 08	 10 「上」
 子儀 02	 中山王墓 墨書玉器 「吉」	 祝辞 04	 11 「上」
 繁年 05		 良臣 01	 11 「之」
 包山 28		 良臣 04	 12 「之」
			 13 「之」

ここでは点画の特徴を明瞭に示す横画に注目する。『邦家之政』の横画は、起筆を打ち込んで送筆から収筆へそのまま真っ直ぐに引き抜く運筆により、直線的な楔形構造をもつ。同様の筆画は、侯馬盟書・温県盟書や中山王墓墨書玉器などの晋系文字と共通し、『良臣』・『祝辞』にも認められる。これに対して楚系文字の多くは、起筆を打ち込んで送筆から収筆へやや右回りに

引き抜く運筆により、曲線的な弓形構造となる(注9)。さらにこうした運筆の違いにより、『邦家之政』の一字全体の構成は直線を主体とした縦長の傾向を示し、曲線を主体とした横長の傾向をもつ楚系文字と様相を異にする。

### ②特定文字の横画収筆部の形体

楚系	晋系	良臣・祝辞	邦政
 邦道 25 「是」	 新出 温県 WT1 K1:3865 「是」	 良臣 09 「定」	 05 「敬」
 上博 君子 03 「是」	 新出 温県 WT4 K6:250 「是」	 祝辞 02 「我」	 06 「是」
 処位 03 「政」	 新出 温県 WT4 K6:212 「政」	 祝辞 03 「武」	 07 「是」
 虞夏 01 「政」	 湖南 27 「是」	 祝辞 03 「戎」	 10 「是」
 心中 04 「必」	 靈彙 1003 「政」		 11 「是」
 郭店 成之 30 「必」			 04 「政」
			 09 「政」
			 11 「政」

『邦家之政』には「正(疋)」や「戈」などの文字(偏旁等を含む)の横画の収筆部を下方に折り曲げた屈曲形体が認められる。このような特定文字の屈曲形体は、侯馬盟書や温県盟書などの晋系文字と共通し、『良臣』・『祝辞』にも見いだされる(注10)。

一方、楚系文字にも横画の収筆部を下方へ巻き込んだような形体が散見されるが、これは楚系文字の特徴である右回転の運筆によって生じた現象であり、「正(疋)」や「戈」以外の諸字にも広く見いだされ、晋系の特定文字

に認められる形体上の特徴とは区別される。晋系の屈曲形体が楚系文字のよ  
うな運筆によって生じたものではないことは、表中の「晋系」に挙げた古璽  
文の用例（湖南27「是」・璽彙1003「政」）からも裏付けられる（注11）。

③「宀」の形体

楚系	晋系	良臣・祝辞		邦政
 赤鶴 12 「室」	 侯馬 67:5 「室」	 良臣 08 「宦」	 良臣 03 「宮」	 03「室」
 孺子 04 「室」	 侯馬 156:1 「宮」	 良臣 09 「定」	 良臣 03 「宮」	 07「室」
 太伯甲 11 「宮」	 侯馬 156:1 「定」	 良臣 10 「宮」	 良臣 03 「宜」	 03「宮」
 処位 01 「家」	 文物 1983.3 温県 T1 坎 1:1845 「室」	 良臣 11 「宰」	 良臣 06 「宥」	 07「家」
 子産 14 「家」			 良臣 07 「宋」	 11「家」

『邦家之政』の「宀」は、その下の文字をスッポリと覆う覆蓋形に作る。  
同様の形体は晋系の侯馬盟書・温県盟書や中山王墓墨書玉器などの晋系文字  
と共通し、『良臣』・『祝辞』にも見いだされる（注12）。一方、楚系文字の  
多くは上部のみを覆う蓋笠形である。

なお、表に示した『邦家之政』の「家」字（簡7・11）は、用字面では  
「宀」の上に「爪」が付いた楚系の「豕」に作るのに対して、書法面では「宀」  
が「家」をスッポリと覆う晋系の覆蓋形に属し、用字と書法の系統上の相違

を一字中に示す例として注目される。

④「心」（偏旁等を含む）の形体

楚系	晋系	良臣・祝辞	邦政	
 邦道 01 「志」	 新出 温県 WT1 K1:3417 「心」	 祝辞 03 「心」	 13「愍」	 07「憲」
 攝命 10 「慮」	 侯馬 3:6 「心」	 祝辞 01 「志」	 04「愆」	 05「憲」
 孺子 18 「慮」	 七年王子戈 「志」	 良臣 10 「恣」	 17「説」	 09「恣」
 郭店・老甲 33「慮」	 侯馬 198:9 「慮」	 良臣 02 「恣」		 09「恣」
 上博・孔詩 20「志」	 中山王鼎 「憚」	 良臣 06 「恣」		 10「恣」
 上博・弟子 問 4「慮」		 良臣 11 「恭」		 12「慮」
				 12「慮」
				 09「憲」

戦国文字中の「心」（偏旁等を含む）を見ると、中心部分の上部が開いた  
U字形と△のように上部が閉じたしずく形との二種が見え（注13）、晋を含  
む非楚系文字は基本的にU字形、楚系文字の大部分はしずく形に属している  
（注14）。「心」は心臓の象形であり、甲骨文や金文の字形から知られるよう  
に（注15）、非楚系のU字形が初形に由来し、楚系のしずく形は後出の形体と  
見なされる。

『邦家之政』の用例はすべてU字形で晋系と合致する。ちなみに現在まで  
に公表された清華簡（壹・拾）の五十二篇を見ると、U字形は『保訓』・『良

『臣』・『祝辞』・『邦家之政』の四篇、しづく形とU字形との両形混在が『厚父』・『成人』の二篇(注16)、それ以外の四十六篇は少数の例外を除いてしづく形に属している(注17)。

以上、四つの観点から『邦家之政』の書法に分析を加え、晋系との共通性を指摘した(注18)。注目されるのは、これらの特徴が一部の文字に見いだされるのではなく、該当する用例のすべてに一貫して認められることである。こうした状況は、『邦家之政』の書写者と晋系書法との緊密な関係を示すものと言えよう。

### 三 『厚父』の書法

前章までの分析によつて、『邦家之政』は用字面では楚系に属し、書法面では晋系との間に緊密な共通性を示すという、他の戦国竹書には見えない特異な性格をもつテキストであることが明らかとなった。それでは、こうした用字と書法に認められる系統上の相違をどのように理解すればよいであろうか。本章では、この問題を考察するための比較資料として、清華簡『厚父』を取り上げてみたい(注19)。

趙平安氏は『厚父』に非楚系文字の特徴が認められ、とくに晋系文字の影響が顕著であることを具体的な字例を挙げて明らかにし、その原因を次のように指摘している(注20)。

由于《厚父》中有明确的晋系文字元素、那些非楚系·既見於晋系又見於其他系的文字很可能也應當視為晋系文字、是受晋系文字影響所致。

通常所說的晋系文字包括趙·韓·魏·中山·兩周(東周和西周)·鄭·衛。漢景帝時河間獻王劉德從其封國中徵集到《尚書》、河間舊爲趙邑、

證明《尚書》在晉地確曾流傳。《厚父》保有明顯的晋系文字元素、說明它的底本原來可能是晋系文字寫本。

『厚父』に晋系文字の影響が認められることは、すでにこの趙氏の論文によつて実証されているので、以下では論及の見られない書法面について、前章の①④の観点に従い分析を加えてみよう(以下に掲げる図版の算用数字は竹簡編号を示す)。

#### ①点画の構造



『厚父』の横画は、右回転の運筆を基調とし、起筆を強く入れ、やや右上下に湾曲させながら收筆を引き抜く曲線的な弓形構造をもち、典型的な楚系の特徴を示す。その結果、一字全体の構成も楚系文字に多見される曲線を主体とした横長の傾向をもつ。

図版には紙幅の関係から「上」の用例全三例と「之」の用例(全二十八例)中三例を掲げた。

#### ②特定文字の横画收筆部の形体



『厚父』には「正(疋)」や「戈」などの特定文字(偏旁等を含む)の横画収筆部に、晋系文字と同様の屈曲形体が見える。この点については、すでに周波氏が、侯馬盟書・温県盟書や他の晋系資料との関連を指摘した上で、『厚父』の屈曲形体を晋系文字の特徴として位置づけている(注21)。

図版には該当する全用例(「咸」02・07／「是」12／「弋」09・12／「戈」03・07)を掲げた。

### ③「亼」の形体



用例が図版に掲げた「亼」の一例にとどまるため、十分に実態を把握し難いが、上部のみを覆う楚系の蓋笠形に属する。

### ④「心」(偏旁等を含む)の形体

「心」



厚父 08



厚父 08



厚父 二



厚父 二

「惠」



厚父 01



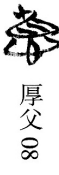
厚父 02



厚父 06



厚父 07



厚父 08



厚父 09



厚父 09



厚父 11



厚父 13

『厚父』の「心」(偏旁等を含む)には、しづく形とU字形の両形が見える。単字「心」は四例のすべてがU字形であるのに対し、偏旁等の「心」で

は十八例中しづく形が十五例、U字形が三例で、しづく形がおよそ八十三%を占める。用例の内訳は以下の通りである(分母は用例数、分子はU字形の数)。

単字「心」(4/4)

偏旁等「惠」(1/9)／「念」(0/1)／「愆」(慎)(0/2)／「紂」(怠)(1/2)／

「恙」(0/2)／「悞」(0/1)／「恆」(1/1)

図版には紙幅の関係から「心」と「惠」の全用例を掲げた。「惠」のU字形の一例は簡7が該当する。

以上、『厚父』の書法について四つの観点から分析を加えた。①点画の構造は楚系と合致するのに対して、②特定文字の横画収筆部の形体は晋系と合致し、さらに④「心」(偏旁等を含む)の形体ではしづく形とU字形が混在する状況が認められた(③「亼」の形体は用例数の制約から保留する)。この分析結果は、『厚父』を晋系テキストにもとづき楚文字を用いて書写した転写本とする趙氏の見解(注22)を書法面から支持するものであり、①は書写者がもともと習得していた楚系書法の反映、これに対して②や④に見える晋系の要素は、底本となった晋系テキストからの影響と見なされる(注23)。

### 結語

それでは、これまでの分析結果にもとづき、『邦家之政』に見える用字と書法の差異について、書写者との関連から考察を加えよう。

先に述べたように、晋系テキストを楚文字で書写したと見なされる『厚父』の書法を分析すると、①点画の構造は、典型的な楚系の特徴を示し、②特定文字の横画収筆部の形体、④「心」(偏旁等を含む)の形体では、晋系の影

響が認められた。こうした状況は、用字については、底本などに影響されて必ずしも書写者の国別に直結しない面があるのに対し、書法面では、②・④のような個別的な形体に他系からの影響が認められるものの、①点画の構造には書写者本来の国別が比較的明瞭に現れることを示すものと言えよう。

そこであらためて『邦家之政』の書法を見ると、①点画の構造のみならず、②③④の個別的な形体についてもすべて晋系文字と合致している。こうした状況は前稿で検討を加えた『良臣』・『祝辞』とも符合し、『邦家之政』の書法に一貫して認められる晋系の特徴は、書写者の国別を反映するものと考えられる。

一方、『邦家之政』の用字が楚系と合致する点については、在楚の晋人が楚系の底本の用字に従って書写した、あるいは楚系の用字を習得した在楚の晋人が書写した、などの状況が想定され、楚系の用字に倣いながら、本来習得していた晋系の書法によって書写した結果、用字と書法とで系統の異なるテキストが成立したと推測される。

戦国文字における国別問題については、これまで文字形体とともに用字面の分析に重点が置かれてきた。言うまでもなく用字はテキストの言語的性格を明らかにする上で重要な指標となるが、上述のような異系の底本からの影響を考慮すれば、書写者の国別の検討においては、用字とともに書写者本来の書記習慣を反映する書法への着目が不可欠となる(注24)。

書法風格を全体的に捉えようとすると、多くの場合、個人差の問題に逢着し、抽象的な議論に陥りかねない。しかし、個人差を超えた国や地域に共通する書法上の特徴に注目し、それを形成する具体的な諸要素(例えば、本稿で挙げた点画の構造や個別の形体にかかわる書き方)について分析を加えるならば、客観性をもった結論を導くことは決して困難ではない(注25)。特に晋系文字の場合は、春秋戦国期の筆記資料がほとんど皆無である齊系文字や

燕系文字とは異なり、春秋末の侯馬盟書・温県盟書や戦国中期後半の中山王墓墨書玉器などが存在し、これらとともに晋系の書法を反映すると見なされる『良臣』・『祝辞』を比較資料に用いることによって、書法に関わる楚系との書記習慣の差異を明らかにし得ると考えられる。

『邦家之政』を中心に用字・書法の両面から分析を加えた本稿は、こうした意図にもとづく字迹研究の一環である。

## 注

- (1) 拙稿「『良臣』・『祝辞』の書写者―国別問題再考―」、『中国研究集刊』第六十二号、二〇一六年、湯浅邦弘編『清華簡研究』、汲古書院、二〇一七年再収、第三一三―三五一頁。
- (2) 以下『邦家之政』の検討は、清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤主編『清華大学藏戰国竹簡(捌)』、中西書局、二〇一八年(『邦家之政』の整理責任者は李均明氏)の図版、釈文、注釈、字形表による。
- (3) 『清華大学藏戰国竹簡(捌)』(前掲注2)、【説明】、第二二二頁。
- (4) 馮勝君『郭店楚簡與上博簡對比研究』、綫裝書局、二〇〇七年、第二九五―二九六頁(附3家・卒)、周波『戰国時代各系文字間的用字差異現象研究』、綫裝書局、二〇一二年、第一七八―一七九頁(317聽)、第七九頁(100焉)、第八九―九〇頁(126乎)、第一八五頁(334始)、第一九二―一九三頁(351當)参照。
- (5) 「𠄎」(文)は、郭店簡『性自命出』簡17・上博簡『曹沫之陳』簡11、「𠄎」(類)は、郭店簡『六德』簡31・上博簡『鬼神之明・融師有成氏』簡6、「𠄎」(𠄎)は、上博簡『容成氏』簡10・『孔子見季桓子』簡15などに用例が見える。
- (6) 「見」と「視」の用字の変遷については、裘錫圭氏の以下の論考を参照。

・「甲骨文中の見与視」、『甲骨文發現一百周年學術研討會論文集』文史哲出版社、一九九八年、『裘錫圭學術文集1・甲骨文卷』、復旦大學出版社、二〇一二年再収、第四四四～四四八頁。

・「以郭店《老子》簡為例談談古文字考釈」、『郭店楚簡与儒學研究 中國哲學第二十一輯』、遼寧教育出版社、二〇〇〇年、『裘錫圭學術文集2・竹簡帛書卷』、復旦大學出版社、二〇一二年再収、第二七五～二八二頁。

・「《戰國文字及其文化意義研究》緒言」、復旦大學出土文獻与古文字研究中心編『出土文獻与古文字研究(第六輯)——復旦大學出土文獻与古文字研究中心成立十周年紀念文集』上冊、上海古籍出版社、二〇一五年、第二二五～二二七頁。

(7) 『清華大學藏戰國竹簡(捌)』(前掲注2)、「邦家之政」【積文】、第一二二頁、【注釈】「一八」・「三二」・第一二四～一二五頁。

(8) 例えは清華簡の『筮法』・『厚父』・『子産』・『良臣』・『祝辭』などの諸篇には、晋系との関連を示す用字が指摘されている。

(9) 楚系文字の書法様式については、拙稿「戰國簡牘文字における二様式」、『第四回國際書學研究大會紀念論文集 國際書學研究/2000』、萱原書房、二〇〇〇年、浅野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』、汲古書院、二〇〇五年再収、第三二九～三五二頁参照。

(10) 拙稿「『良臣』・『祝辭』の書写者—國別問題再考—」(前掲注1)第三四二頁、周波『戰國銘文分域研究』、上海古籍出版社、二〇一九年、第二二四頁参照。

(11) (10)で留意されるのは、安徽簡『詩經』の「是」字の一部に横画収筆部の屈曲形体が見える点である。ただし屈曲形体は、十六例中の四例(047・11例・075・084)であり、他の「正(疋)」や「戈」など(偏旁等を含む)には認められないことから、これを直ちに非楚系文字の影響と見ることは慎重な検討が必要であろう。楚系文字の「是」には、「日」の下の横画左端を「ヨ」のような三つ又に作る例も見えるが、屈曲形体もこれらと同様、古体に由来する繁文の一種である可能

性も考慮される。なお晋系の屈曲形体も古体に由来すると見なされるが、それが書法上の習慣として特定の文字に共通して見いだされる点に特徴がある。


(12) 拙稿「『良臣』・『祝辭』の書写者—國別問題再考—」(前掲注1)第三四一頁。

(13) U字形とせずく形には、④表中に挙げた晋系の侯馬<sup>33</sup>「心」や楚系の郭店・老甲<sup>33</sup>「惠」のような、左の足を伸ばした長脚体も含む。

(14) 戰國竹書の用例について概要を述べれば、郭店簡はしずく形が中心的な位置を占め、U字形は『忠信之道』にほぼ限定される。上博簡も同様に大部分がしずく形であり、U字形は一部の例外を除いて、『周易』・『孔子見季超子』・『武王踐阼』などの諸篇にほぼ限定される。安徽簡『詩經』は単体「心」はしずく形であるが、偏旁等ではしずく形とU字形との両形が見える。一方、非書籍簡を見ると、曾侯乙墓竹簡は単体の用例は見えないが偏旁等は両形、包山楚簡は単体はしずく形、偏旁等は両形、望山楚簡・新蔡葛陵楚簡は単体・偏旁等ともに両形が見える。しずく形とU字形とが混在する現象については、非楚系からの影響という地域差に関わる要因とともに、楚系内における書写集団の性格や時代差に関わる要因なども考慮する必要があり、この点は今後の課題としたい。

(15) 劉釗主編『新甲骨文編(増訂本)』、福建人民出版社、二〇一四年、第六一六頁、董蓮池編著『新金文編』、作家出版社、二〇一一年、第一四八〇～一四八二頁参照。

(16) しずく形とU字形との両形が混在する『厚父』・『成人』のうち、『厚父』については本文で後述するように、晋系文字の影響が指摘される。一方、『成人』には用字・書法の両面で晋(非楚)系の影響は認められないようであり、前掲注(14)で述べたような他の要因が考慮される。

(17) なお『繁年』の原釈に従えば「」(簡5、二例)のみがU字形に属するが、その後の研究により、当該字の下部は「心」ではなく「口」の変形であることが指摘され、最新の釈文では「台」に修正されている(李学勤主編・沈建華・賈連翔編『清華大學藏戰國竹簡(壹—參)文字編(修訂本)』中西書局、二〇二〇年、第三二、

四一一頁)。この点については、蘇建洲・呉雯雯・賴怡璇合著『清華二《繫年》集解』(萬卷樓、二〇一三年、第五一〜五二頁)参照。同様な例は、上博簡『三德』簡一六・簡二〇の「忞」にも見え、李守奎・曲冰・孫威龍編著『上海博物館藏戰国竹書(一)五文字編』(作家出版社、二〇〇七年、第四八八頁)は「按、與「心」旁有別。疑是「口」旁的變形」と注記する。

(18) 単独の用例であるため、本文では取り上げなかったが、晋系との共通性は「兄」の形体にも指摘される。『邦家之政』簡5の「兄」(𠄎)は上部の「口」の横画を両側に突き出す形に作り、侯馬盟書や晋壘などの晋系資料と合致する。これに対して楚系は突き出さない形(例えば『皇門』簡12 𠄎)に作る。なお郭店簡『語叢一』簡70と上博簡『彭祖』簡5にも各一例、横画を突き出す形が見える。この形体は齊系文字にも見え、先学が指摘する両篇と齊系文字との関連を裏付ける(馮勝君『郭店簡与上博簡对比研究』二〇〇七年、綫装書局、第二五〇〜三二〇頁参照)。

(19) 以下『厚父』の検討は、清華大学出土文献研究与保护中心編、李学勤主編『清華大学藏戰国竹簡(伍)』、中西書局、二〇一五年(『厚父』の整理責任者は趙平安氏)の図版、釈文注釈、字形表による。

(20) 趙平安「談談戰国文字中值得注意的一些現象——以清華簡《厚父》為例」、『出土文献与古文字研究』第六輯、上海古籍出版社、二〇一五年、趙平安著『新出簡帛与古文字古文献研究統集』商務印書館、二〇一八年再収、第一三〇頁。

(21) 周波『戰国銘文分域研究』、上海古籍出版社、二〇一九年、第二一四頁。

(22) 趙平安「談談戰国文字中值得注意的一些現象——以清華簡《厚父》為例」(前掲注20)第一三六頁。

(23) 『厚父』の書写者について留意されるのは、『厚父』と清華簡『攝命』とを同じ書写者とする見解が、李松儒氏によって提出されていることである(李松儒「《清華八》《攝命》字跡研究」、『中国文字』二〇二二年夏季号 総第三期、萬卷樓、第

三四一〜三五五頁)。『攝命』の書法は本稿第二章に挙げた①〜④のすべてが楚系と合致しており、李氏の見解に従えば、『厚父』の書法は部分的に底本となった晋系文字のテキストの影響を受けたものであるのに対し、『攝命』は書写者本来の楚系の書法によって書写されたと解釈されよう。

(24) 劉剛『清華參《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証』(『中国文字学報 第五輯』二〇一四年七月、第九九〜一〇七頁)は、『良臣』に晋系文字との緊密な共通性が見えることを指摘する一方、「《良臣》篇有些文字形体和用字習慣也具有明顯的楚文字特点、而与一般晋系文字不合」の例として、「黄」・「申」・「論(𠄎)」・「賢(文)」の四字を挙げ、『良臣』は楚人が晋系の底本を用いて書写したものであると結論づけている。しかし前稿(前掲注1)で指摘したように、『良臣』には文字形体や用字のみならず、書法面においても本稿で挙げた①〜④の特徴がすべて合致するなど、晋系との緊密な共通性が認められる。これらをすべて底本からの影響として説明することは難しく、むしろ晋人が書写したもので、一部に楚系文字の混淆を生じた、と見るのが妥当であろう。前稿で提起した『良臣』・『祝辞』の書写者に関する筆者の見解は、本稿における『邦家之政』の分析結果からも支持される。

(25) 晋系以外の書法習慣にかかわる国別の例として、秦系と楚系との間に見える「止(之)」系諸字の書法(筆順)の相違が挙げられる。この点については拙稿「清華簡《保訓》与三体石経古文——科斗体的淵源」(中文版)、『出土文献研究』第十三輯、中西書局、二〇一四年、湯淺邦弘編『清華簡研究』、汲古書院、二〇一七年再収(日文版)、第二八九〜三一頁参照。

#### 【参考文献】

#### 【戦国文字資料】

・何琳儀『戦国古文字典——戦国文字聲系』中華書局、一九九八年、二〇〇四年重印

・湯餘惠主編『戰國文字編(修訂本)』福建人民出版社、二〇一五年

【楚系資料】

・張光裕・滕壬生・黃錫全主編『曾侯乙墓竹簡文字編』藝文印書館、一九九七年

・張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷文字編』藝文印書館、一九九九年

・李守奎『楚文字編』華東師範大學出版社、二〇〇三年

・李守奎・曲冰・孫偉龍編著『上海博物館藏戰國楚竹書(二—五)文字編』作家出版社、二〇〇七年

・程燕編著『望山楚簡文字編』中華書局、二〇〇七年

・張新俊・張勝波著『新蔡葛陵楚簡文字編』巴蜀書社、二〇〇八年

・清華大學出土文獻研究與保護中心編、李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』

中西書局、二〇一〇(二〇一八年)

・主編 饒宗頤・副主編 徐在國『上博藏戰國楚竹書字匯』北京師範大學出版集團・安徽大

學出版社、二〇一二年

・李守奎 賈連翔 馬楠編著『包山楚墓文字全編』上海古籍出版社、二〇一二年

・李學勤主編 沈建華 賈連翔編『清華大學藏戰國竹簡(肆—陸)文字編』中西書局、二〇

一七年

・清華大學出土文獻研究與保護中心編、黃德寬主編『清華大學藏戰國竹簡(玖)・(拾)』

中西書局、二〇一九・二〇二〇年

・安徽大學漢字發展與應用中心編 黃德寬 徐在國主編『安徽大學藏戰國竹簡(一)』中西

書局、二〇一九年

・李學勤主編 沈建華・賈連翔編『清華大學藏戰國竹簡(壹—參)文字編(修訂本)』中西

書局、二〇二〇年

【晉系資料】

・張守中撰集『中山王鐸器文字編』中華書局、一九八一年

・河南省文物研究所「河南溫縣東周盟誓遺址一號坎發掘簡報」、『文物』一九八三年第三

期

・艾蘭・邢文編『新出簡帛研究』口繪 函版四 溫縣盟書、函版十七 溫縣盟書、文物出版

社、二〇〇四年

・山西省文物工作委員會編『侯馬盟書(增訂本)』山西古籍出版社、二〇〇六年

・中國法書全集編輯委員會編『中國法書全集 第1卷 先秦秦漢』三八 河北平山中山王鐸

墓墨書玉器、文物出版社、二〇〇九年

・西林昭一責任編集『簡牘名蹟選 10 河南・山西篇』溫縣盟書 1、7、侯馬盟書 1、7、

二玄社、二〇一二年

・湯志彪編著『三晉文字編』全六冊、作家出版社、二〇一三年

【附記】

本稿は、第七十二回中國出土文獻研究会(二〇二〇年二月二十九日〜三月一日)にお

ける筆者の発表「清華簡(捌)の字迹」、および第七十三回中國出土文獻研究会

(オンライン会議・二〇二一年三月二十六日)における筆者の発表「戰國竹書の用字・

書法と書写者—清華簡『邦家之政』を例として—」にもとづく。また本稿は、JSPS科

研費19J01103(研究代表者 湯淺邦弘教授(大阪大学))の助成による研究成果の一部で

ある。

福田 哲之(ふくだ・てつゆき)

一九五九年生まれ。島根大学大学院教育教育学系教授。専門は中国文字学・書道

史。共著に『清華簡研究』(湯淺邦弘編、汲古書院、二〇一七年九月)、主要論文

に「北京大学藏漢簡《蒼頡篇》的綴連復原」(『出土文獻与古文字研究』第八輯、

二〇一九年十一月)、「『蒼頡篇』の押韻と章序」(『島根大学教育学部紀要』第

五四卷 人文・社会科学、二〇二一年二月)など。